

## 【研究論文】

## 教育実習事前指導における模擬授業のためのルーブリックの改善

広島文教大学教育学部教育学科

教授 今 崎

浩

## 1 はじめに

本学（前身は広島文教女子大学）では、平成24年8月に公表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を受け、授業計画（シラバス）、学生による授業評価、ファカルティ・ディベロップメント（FD）の取組などの充実を図ってきた。また、学生に事前学修・事後学修を促す教育上の工夫、インターンシップや留学体験等の教室外学修プログラム等の提供等にも努めてきた。

とりわけ、成績評価の妥当性・信頼性を高めていくための手法としてルーブリックを用いた評価を学士課程教育の質的転換の要として位置付け、授業科目「教育実習Ⅰ」においては、今崎（2015）が提案したルーブリック（以下、「2015年作成模擬授業ルーブリック」と呼ぶ。資料1参照）及びその運用方法をベースに、模擬授業においてルーブリック評価を実施することによって、評価の妥当性・信頼性は高めてきた。また、授業担当教員は授業のゴールが明確になり、そのゴールに向かってより的確な指導を行うことができるようになった。さらに、教員の指導改善を図るべき事項がより明確になるといった成果も見られた。

その後、岡ら（2017）によって、ルーブリック及びその運用方法について、考察が行われ、改善点が指摘されたが、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響によって、模擬授業を学習指導案の検討に変更したこともあり、大幅な改善は行われず、現在に至っている。

しかしながら、近年の学校教育を取り巻く状況は、教育公務員特例法改正に伴う任命権者による校長及び教員としての資質の向上に関する指標の設定、学習指導要領の改訂、GIGAスクール構想の発表及び推進、中央教育審議会による『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）の公表、生徒指導提要の改訂等によって、大きく変わってきており、教職課程を持つ大学に求められる育成すべき資質・能力も変化してきている。

特に、教育実習校の校長は、教育実習の評価において評価項目7項目のうち、「授業展開」を最も低い評価としており、授業力向上を求めている。

そこで、本稿では教育実習生の授業力向上を図るため、2015年作成模擬授業ルーブリックについて、岡ら（2017）の研究や近年の教育の動向を踏まえながら改善していくことを目的とする。

## 2 2015年作成模擬授業ルーブリック改善の必要性

## 2.1 教育実習校の教育実習生に対する評価

本学では、教育実習後に教育実習生の評価を依頼している。令和4年度教育実習終了後、教育実習校の校長による教育実習生の各項目の評価は表1-1のとおりであった。

なお、実際の評価は項目ごとに「a：優れている」、「b：普通」、「c：不十分である」の3段階評価で記載することになっているが、ここでは「a：3」、「b：2」、「c：1」と数値に置き換え、平均点を算出した。

表1-1 令和4年度 校長による教育実習生の評価の平均点（全77人）

項目	主な着眼点	平均点
1 教職に関する自覚	教職に対する自分の考えを常に問い直し、実習を通して教職に対する自覚が深められたか。	2.8
2 児童一人ひとりの価値の尊重	児童一人ひとりの願いを感じとり、その可能性の実現に向かって、常に努力していったか。	2.7
3 他者の理解と自己の変革	指導担当教諭をはじめ教職員や他の実習生に対して常に心を開き、理解しようと試み、そこで学んでいく事柄を自分の実習に生かそうとしたか。	2.8
4 教材研究	教科等の内容について学問的な研究を深め、それを基盤にして教材を選択し、授業計画を立てようとしたか。	2.6
5 授業展開	児童の表情や発言を的確に理解しながら、適切な発問・説明・板書などによって意欲的な学習を展開させようとしたか。	2.4
6 児童の集団活動の把握と指導	教科外の児童や学級の諸活動に積極的に参加し、自治的集団活動の教育的意義を理解しようとしたか。	2.7
7 事務・実務能力	学級経営上の事務処理などが的確にできたか。実習記録や書類などを期限内に作成し、提出したか。	2.6

また、評価の分布は図1-1のとおりであった。

図1-1 令和4年度 校長による教育実習生の評価の分布（全77人）

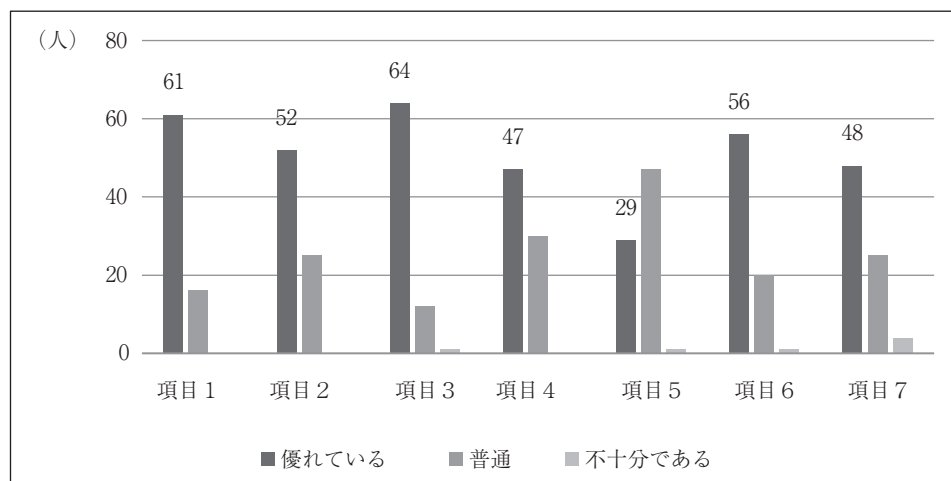


表1-1から、項目1「教職に関する自覚」、項目3「他者の理解と自己の変革」の平均点が2.8点と7項目の中で最も高く、次いで、項目2「児童一人ひとりの価値の尊重」、項目6「児童の集団活動の把握と指導」の平均点が高かった。また、これらの項目は図1-1からも分かるとおり、項目1は「優れている」と評価された実習生が全体の約79%、項目3が約83%、項目2が約68%、項目6が約73%であった。

一方で、項目5「授業展開」の平均点は2.4点と7項目のなかで最も低く、「優れている」と評価された実習生も約38%と他の項目と比べて少なかった。

また、校長の総合所見の中でも、多くの校長が教材研究や教材・教具の作成等の授業づくりへの姿勢を肯定的に評価している一方で、次のような記述も見られた。

- ・単元のゴールを見据えた授業展開ができるような教材研究ができるようになるとうい。
- ・授業も学級経営もゴールをイメージして取り組めると良いと思います。
- ・子どもたち一人ひとりをしっかりと見取り、柔軟に対応できる力が付いていくとさらによいと思います。
- ・児童の実態に応じた柔軟性が必要と思われる。
- ・授業展開では児童の考えを引き出す発問に苦労していました。
- ・授業の際、話し方や教材の準備に課題はあるが、（以下、省略）

以上のことから、教育実習校の校長は、実習生の教職に就くという自覚や責任感などの態度や、教

育実習において実習校の教職員や他の実習生から学ぼうとする態度は高く評価していると言える。これらに比べると、授業を実施する力への評価が低く、大学においてさらに授業力の向上を図る必要がある、そのための手だての一つとしてルーブリックを見直してみる必要があると考えた。

## 2.2 教育実習生に対する評価の「ぶれ」と「ずれ」

本学の教職課程では、3年次後期に行われる小学校教育実習の事前指導として3年次前期に「教育実習Ⅰ」を行うこととしている。その授業において、履修生は3教科の模擬授業を実施することになる。今年度は同授業における模擬授業は国語、社会、算数、理科、図画工作、音楽、外国語（外国語活動を含む）、道徳の8教科を8人の専任教員で指導・評価を行った。

評価にあたっては、学習指導案の記述と模擬授業の実施状況の評価対象として、2015年作成模擬授業ルーブリックを用いて評価した。

具体的には、12の評価項目について、レベル4（4点）、レベル3（3点）、レベル2（2点）、レベル1（1点）の4段階で評価した。

表1－2は、令和5年度の実習において、各評価項目において、評価が最も高かった教員の平均値、評価が最も低かった教員の平均値、また、それらの差をまとめたものである。

表1－2 令和5年度 授業担当教員による模擬授業の評価（全94人）

評価対象	評価項目	評価が最も高かった 教員の平均値（A）	評価が最も低かった 教員の平均値（B）	AとBの差
学習指導案	教材観	4.0	2.9	1.1
	指導観	3.9	2.9	1.0
	指導と評価の計画	3.9	2.9	1.0
	本時の学習過程	3.9	2.9	1.0
	板書計画	3.4	2.9	0.5
	教材・教具の活用	3.9	3.1	0.8
授業実施	学習規律の指導	4.0	2.7	1.3
	質問への対応	3.9	2.9	1.0
	考えの取り上げ方	3.9	3.0	0.9
	個に応じた指導	3.8	2.7	1.1
	発問・指示・説明	3.9	3.0	0.9
	板書	3.8	2.9	0.9

この結果を見ると、板書計画を除く11の評価項目において、評価が最も高かった教員の平均値と、評価が最も低かった教員の平均値の差が0.8から1.1となっており、レベルで言うと1段階違うという評価結果となっている。

また、評価が最も高い教員の平均値は板書計画以外の11の評価項目は3.8から4.0となっており、ほぼ満点に近い評価であった。2.1で述べた教育実習校の校長の実習生に対する評価との違いが見られた。さらに、各教員の評価対象別の平均値を示したのが、表1－3である。

表1－3 各教員の評価対象別の平均値

教員	学習指導案を評価対象とした 評価項目の平均値	授業実施を評価対象とした 評価項目の平均値
教員A	2.9	3.9
教員B	3.1	3.3
教員C	3.3	3.3
教員D	3.8	3.5
教員E	3.1	3.2
教員F	3.3	3.3
教員G	3.2	3.3
教員H	3.3	3.0

（平均値が高い方にアンダーラインを引いている）

学習指導案を評価対象とした評価項目の平均値の方が高い教員が2名、授業実施を評価対象とした評価項目の平均値が高い教員が4名、両者の平均値が同じであった教員が2名という結果であった。

以上のことより、授業担当教員間の評価に「ぶれ」が見られることが分かった。その要因としては、授業担当教員が、ルーブリック（評価規準及び評価方法、評価基準）について、教員間での共通理解を図る場を持ち、その際に、評価の時期、評価基準の各レベルの境目等について十分に検討しておく場を設けることができなかったこと、ルーブリックそのものに改善すべき点があることなどが考えられる。

また、学習指導案を評価対象とした評価項目は、教育実習の評価項目「教材研究」にあたり、授業実施を評価対象とした評価項目は、教育実習の評価項目「授業展開」に相当する。授業担当教員は「教材研究」よりも「授業展開」を高く評価している者が多く、中にはほぼ満点に近い評価をしている教員もいた。このことから、2.1で述べた教育実習校の校長と授業担当教員の実習生に対する評価に「ずれ」が見られることも分かった。

### 3 岡ら（2107）の研究からの示唆

岡ら（2017）は、2015年作成模擬授業ルーブリックを用いて評価を行った授業担当教員及び学生を対象にアンケート調査を実施し、その結果を整理・考察している。

#### 3.1 岡ら（2017）の指摘

##### (1) 授業担当教員が挙げる問題点

岡らは、ダネルら（2019）の「ルーブリックを総合的に評価するメタ・ルーブリックの例」（p.79）を参考に調査用紙を作成し、2015年作成模擬授業ルーブリックに関するアンケート調査を実施した。

授業担当教員は、次の2項目について、否定的な評価をしている教員が7名中3名を超えており、問題点であると指摘している。

調査項目「全ての評価基準が明確である。」

調査項目「評価しようとする学習成果とは無関係の、この模擬授業で扱っていないスキルに基づいて、評価されることはない。」

また、2015年作成模擬授業ルーブリックの各区分・評価項目について、否定的な評価をしている教員が全体の約3割以上の場合を要チェックと見なし、問題点としている。

その具体的な評価項目は、次のとおりである。

- |              |                |
|--------------|----------------|
| ・板書計画        | ・授業で用いられた教材・教具 |
| ・学習規律の指導     | ・児童の質問に対する対応   |
| ・遅れがちな児童への対応 | ・板書の実際         |

これらの評価項目は、教材開発力、授業展開力、表現技術の区分に当たる項目で、授業実施を評価の対象としている項目であった。

また、自由記述から見えてくる問題点として、「工夫している」という記述に具体性を持たせる必要があると指摘している。

##### (2) 学生が挙げる問題点

学生の場合は、否定的な評価が有効回答数71名のうち、15名以上（約2割以上）の場合を要チェックと見なしている。

その結果、ルーブリックのなかにある「キーワード」「評価方法」について要チェックとしている。

また、評価項目については、次の項目を挙げている。

- |            |          |
|------------|----------|
| ・学習指導案の教材観 | ・学習規律の指導 |
|------------|----------|

・遅れがちな児童への対応

この3項目のうち、2項目は授業展開力の区分に当たる項目である。

また、自由記述から見えてくる問題点として、「適切に」「的確に」という記述に具体性を持たせる必要があること、教科の特性や15分間の模擬授業では評価できない場合があること、レベル3とレベル2の差が大きいことを指摘している。

### 3.2 岡らの研究からの示唆

3.1から2015年作成模擬授業ルーブリックの改善に当たっては、授業担当教員・学生ともに否定的な評価をしている区分「授業展開力」に着手する必要があると考える。このことは、2.2で述べた授業担当教員間のぶれや教育実習校のずれが最も顕著であった「授業展開」を改善していくことにもつながることと言える。

そのための具体的な改善の方向性として、次の2点が挙げられる。

1 点目は、評価基準<sup>※1</sup>の表現を具体的にすることである。

ルーブリックの役割として、学生自身が何を目標とするのか（goal）と、目標に対してどこまで到達できているのか（achievement）を把握し、主体的な学びを促すことが重要であると考え。そのためには、授業担当教員・学生がともに問題点として挙げた評価項目を中心に、評価基準の表現をより具体的にしよう努める必要がある。

また、文章表現で不十分な場合は、授業のガイダンスにおける説明、フィードバックの方法の工夫によって、補完する方法を考える必要がある。

2 点目は、評価時期・評価方法を妥当性のあるものとするすることである。

15分の模擬授業の中では、評価できる状況がない場合も考えられる。そこで、評価対象を広げるなど、妥当な評価時期・評価方法を設定するよう改善していく必要がある。

## 4 2015年作成模擬授業ルーブリックの改善

### 4.1 改善の基本方針

ルーブリックを学生の主体的な学びを促すための資料とすることを前提とした上で、前述の3.2を踏まえ、改善の基本方針を以下のとおりとした。

- 1 国・各自治体の動向も踏まえ、3年後期の教育実習を履修する学生として、身に付けさせたい資質・能力について評価する。
- 2 学習指導案及び15分の模擬授業のなかで評価可能な評価項目とする。
- 3 授業展開の評価に重点を置く。
- 4 評価基準を具体的な記述とする。

### 4.2 基本方針に基づく改善内容

- (1) 基本方針1「国・各自治体の動向も踏まえ、3年後期の教育実習を履修する学生として、身に付けさせたい資質・能力について評価する」について

※1 本稿では、評価規準の実現状況を事実に・行動的に文章表現したものを「評価基準」と呼ぶこととする。



教育公務員特例法の改正に伴い、各自治体では校長及び教員としての資質の向上に関する指標を設定することが義務づけられた。広島県の場合、新規に採用する教員に対して任命権者が求める資質を第一の段階に相当するものを採用期として、指標を示している。

例えば、現行の学習指導要領において、各教科等に求められたコンピュータ等や教材・教具の活用について、採用期の指標は「デジタル機器を活用することができる」とし、充実期において「授業のねらいを達成するために、デジタル機器を効果的に活用したり、幼児児童生徒に活用させたりすることができる」としている。このことから、教育実習生に「効果的に」活用することが求められているのではなく、まずはICT機器を活用できることが求められていると考えるのが妥当であろう。

教育公務員特例法改正の他にも、近年、2015年作成模擬授業ルーブリック以降、学習指導要領の改訂、GIGAスクール構想の発表及び推進、中央教育審議会による「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」の公表、生徒指導提要の改訂等、教員に求められる資質・能力は大きく変化してきている。それらも踏まえながら、3年後期の教育実習を履修する学生として身に付けさせておきたい資質・能力について評価規準・評価基準を設定するようにする。

#### (2) 基本方針2「学習指導案及び15分の模擬授業のなかで評価可能な評価項目とする」について

本授業で実施する模擬授業は15分であるため、その時間の中で評価可能な状況が起こらないこともあり得る。

例えば、2015作成模擬授業ルーブリックでは評価基準「全ての児童を授業に参加させるため、進んでいる児童、遅れがちな児童それぞれに適切な指導を行っている」としているが、このことについて、授業開始15分で進んでいる児童と遅れがちな児童が存在するような状況が起こるとは限らない。むしろ、15分以降に評価可能な状況が起きることが多いと予想され、こうした点が教員間の評価のぶれを生む要因になっていると考える。

改善にあたっては、実施した授業だけでなく、学習指導案の記述も評価対象に加える等の変更を検討していくこととする。

#### (3) 基本方針3「授業展開の評価に重点を置く」について

2で述べたとおり、教育実習校の校長の評価は、教材研究に比べ授業展開の方が低く、校長からは教育実習生の授業力を向上させることが期待されている。したがって、ルーブリックも授業展開の重点を置いた評価に改善していくことが望ましいと考える。

その方法としては、評価項目によって、得点に重みづけをするという方法が考えられる。また、2015作成模擬授業ルーブリックにおいて、例えば評価規準「子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる」の評価基準の一つとして「全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている」と設定している。これは全員に聞こえる声の大きさが適切であるかの評価と、自治体や教育実習校の校長が求めている発問、指示、説明の適切性の評価の2つの評価を1つの評価基準にしている。こうした場合、1つの評価基準を2つに分けて評価するという方法を考えられる。このようにして、授業力の向上に資するルーブリックに近づくよう検討していく。

#### (4) 基本方針4「評価基準を具体的な記述とする」について

3で述べたとおり、授業担当教員、学生共に挙げていた問題点として、評価基準の記述に具体性に欠ける記述が見られることがある。このことを改善することは、各レベルの違いを明確にし、ルーブリック作成の目的に沿った内容になることに通じるものと考えられる。

2015年作成模擬授業ルーブリックは、資料1のとおり5つのキーワード・評価規準を設定し、それらを細分化し、教材分析力は1、授業構想力は4、教材開発力は1、授業展開力は4、表現技術は2の計12の評価基準を設定しているが、そのうち、具体性に欠け、教員、学生が共通の事実や行動をイメージできにくいと思われる記述としては、「工夫が見られる（工夫している）」「毅然とした」「的確に」「適切に（な）」「簡潔に」が考えられる。これらの記述は、レベル4の12の評価基準のうち、9の評価基

準に見られる。このことはレベル3よりも高い段階としてのレベル4を設定しようとしたことによるものである。しかし、それがルーブリックの分かりにくさや評価のぶれを生む要因になっていると考えられる。

このことに関わって、ダネルら（2014）は「ルーブリックの評価尺度に決められた段階数はないが、ほとんどの教員は、3－5段階の評価尺度で行動を記述することを好んでおり、5段階が上限である。段階数を増やせば増やすほど段階間の違いを付けることが難しくなるし、ある学生がその評価になった理由を明確にすることも難しくなる」（p.7）と述べている。段階数を増やして設定した方が記述の内容がより明確になるというよさもあるが、実際に運用した結果、問題が生じていることから、ルーブリック作成の目的に照らして、3段階で設定することを検討していく。

#### 4.3 改善の実際

4.1, 4.2を踏まえて、資料2のとおり「2023作成模擬授業ルーブリック」を作成した。

詳細は資料2のとおりであるが、大きな改善点が2点ある。

1点目は、実施された模擬授業を評価対象とする評価項目を6項目から8項目に増やしたことである。このことは、授業力の向上を期待する教育実習校の校長の求めに応えたものである。8項目の中でも、板書や発問・指示・説明、話し方など、授業を行う上での基礎的な技術に関する項目を2項目から5項目に増やした。このことは、3年前期という履修時期に相応しい評価基準にするという基本方針を踏まえたものでもある。3年前期という履修時期に相応しい評価基準にするという面では、各自治体が作成した教員を対象に設定した資質の向上に向けた指標や授業力の評価するシートの記述を参考とした。

例えば、広島県教員等資質向上指標（教諭・講師）では、採用期を経た充実期の指標において、「指導の手だてを工夫するなど」「デジタル機器を効果的に活用したり」等の記述が見られる。学生自身が自らの授業力の向上に向けて努力し続けることは大切なことであるが、同授業の評価として履修時期に相応しいと考える記述とした。

2点目は、評価基準の記述をより明確にしたことである。具体的には評価基準のレベルを4段階から3段階に変更するとともに、「適切」「工夫」などの記述を最小限にとどめた評価基準とした。このことは、授業担当教員、学生ともに挙げていた、より具体性を持たせた記述にすることが望ましい、各レベルの違いを明確にすべきといった問題点について改善しようとしたことによるものである。

なお、実施された模擬授業を評価対象とする評価項目を増やす一方で、学習指導案及び教材・教具を評価対象とする評価項目を6項目から5項目に減らした。

## 5 終わりに ～効果的な運用に向けて～

4において提案した2023作成模擬授業ルーブリックは、岡らの研究を踏まえ、筆者個人が改善したものであり、教育実習校の評価のずれや授業担当教員間の評価のぶれは一定程度解消されることが期待されることが考えるが、さらに改善を図り、授業の中で効果的に運用していくためには、次の2点が特に必要であると考ええる。

1点目は、授業担当教員間での共通理解、教員と学生間での共通理解を図る場を設定することである。このことは、学生自身が何を目標とするのか（goal）を把握するために必要な場となる。複数の教員が授業を担当する場合、授業担当教員間での共通理解を図ることの必要性については、ルーブリックを用いた評価を実施した多くの教員が述べているところであるが、特に、評価の対象、時期、評価基準の各レベルの境目等については、学生の具体的な学習指導案の記述や行動を想定して、十分に検討し、共通理解を図っておく必要があると考える。

このことは、教員と学生間でも同様のことが言え、模擬授業が始まる前のガイダンスの内容について検討する必要があると考える。

2点目は、学生への早期のフィードバックを徹底することである。このことは、学生自身が目標に対してどこまで到達できているのか(achievement)を把握するために必要な取組となる。各評価基準に対して、自身はどのレベルにあるのかを把握することによって、次の模擬授業での目標を自ら設定することができるようになる。フィードバックの際には、単にどのレベルにあるかを伝えるだけでなく、そのレベルである理由について、アンダーラインで示したり、コメントを記載したりすることが望ましいと考える。

筆者は、これら2点が共に実施されることによって、主体的な学びを促すというルーブリック評価の目的に迫ることができると考える。

また、本稿で作成したルーブリックは教育実習の事前指導として行われる「教育実習Ⅰ」で用いることを想定したものであり、先述のとおり授業を行う上で必要となる基礎的な技術に重点を置いたものとなっている。言い換えると、教科共通のルーブリックと言ってもよい。

本学では各教科の指導に係る授業は、算数科を例にとると「教科の学び(算数)」、「算数科教育法」、「教材の研究と開発(算数)」、「算数科教育法演習」があり、これらの中で、模擬授業を実施する授業は「算数科教育法」と「算数科教育法演習」である。これらに「教育実習Ⅰ」を加えた3つの授業で模擬授業を行うこととしている。

各教科の本質を共に深め合う授業が求められているなかで、3つの授業で実施される模擬授業のねらいと系統性を明確にし、それらを授業担当教員が共通理解して各模擬授業の指導に当たっていくことが、学生の真の授業力の向上に繋がると考える。

【注1】「教育実習」及び「教育実習Ⅰ」の評価については、広島文教大学教職センターから情報提供していただいた。

## 【引用・参考文献】

- ・今崎浩(2015)．広島文教女子大学におけるルーブリック評価の導入について：成果と今後の課題．広島文教女子大学高等教育研究第1号．25－41．
- ・今崎浩(2017)．小学校教員を目指す学生の算数科における授業力向上に関する研究：模擬授業におけるルーブリックの開発．広島文教女子大学高等教育研究第3号．11－20．
- ・大野内愛(2022)．音楽科教員養成課程における模擬授業の課題に関する一考察 ―準備のプロセスに着目して―．広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第3号．  
<https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/53390/files/44906> (2023.9.25参照)
- ・岡利道・今崎浩・大野内愛(2017)．ルーブリック評価の運用に関する研究：小学校各教科の模擬授業・卒業研究の場合．広島文教女子大学教職センター年報第5号．  
<https://doi.org/10.51095/kyoshoku.05.01> (2023.10.24参照)
- ・ダネル・スティーブンス・アントニア・レビ・(2014)．大学教員のためのルーブリック評価入門(監訳：佐藤浩章．訳：井上敏憲・俣野秀典)．玉川大学出版部．7.79-80．
- ・東京都教育委員会(2023)．東京都公立学校の校長・副校長及び教員の資質の向上に関する指標．都立学校校長等 資質向上に関する指標を改定 | 東京都([tokyo.lg.jp](https://www.tokyo.lg.jp))．(2023.9.25参照)
- ・広島県教育委員会(2021)．広島県教員等資質向上指標(教諭・講師)．  
[426433.pdf](https://www.hiroshima.lg.jp/426433.pdf) ([hiroshima.lg.jp](https://www.hiroshima.lg.jp)) (2023.9.25参照)．
- ・広島市教育委員会(2022)．校長及び教員としての資質の向上に関する指標(研修マップ)．53989.pdf ([hiroshima.lg.jp](https://www.hiroshima.lg.jp)) (2023.9.25参照)
- ・渡会純一(2018)．教員養成課程における模擬授業の評価の観点に関する一考察：小学校音楽科模擬授業における観点別ルーブリックの作成および実践を通して．東北福祉大学研究紀要第42巻．  
<https://doi.org/10.57314/00000551> (2023.9.25参照)



【投資評價表(投資相乗率)】

[illegible]

資料2 2023年作成模擬授業ルーブリック

2023年作成模擬授業ルーブリック

評価の対象	評価標準	レベル3(3)	レベル2(2)	レベル1(1)	評価
学習指導案	【教材観】 教材観に次の事項を記述している。 1 学習指導要領の位置付け 2 単元の目標と主な学習内容 3 学習内容の系統性 4 学習内容を学ぶ意義やよさ	【教材観】 教材観に次の事項を記述している。 1 学習指導要領の位置付け 2 単元の目標と主な学習内容 3 学習内容の系統性 4 学習内容を学ぶ意義やよさ	【教材観】 教材観に次の事項を記述している。 1 学習指導要領の位置付け 2 単元の目標と主な学習内容 3 学習内容の系統性	【教材観】 教材観に次の事項を記述している。 1 学習指導要領の位置付け 2 単元の目標と主な学習内容	
十分な教材研究に基づき、単元及び本時の目標を明確にした学習指導案の学習指導案を作成している	【指導観】 教材観・学習観に記述した内容を踏まえた単元(本時)の学習展開や指導方法の工夫(ICT機器の活用を含む)、指導上の留意点などを具体的に記述している。	【指導観】 教材観・学習観に記述した内容を踏まえた単元(本時)の学習展開や指導方法の工夫(ICT機器の活用を含む)、指導上の留意点などを具体的に記述している。 ※本時の目標との整合性、妥当性に欠けることがある。	【指導観】 単元(本時)の学習展開や指導方法の工夫(ICT機器の活用を含む)、指導上の留意点などを具体的に記述している。 ※本時の目標との整合性、妥当性に欠けることがある。	【指導観】 単元(本時)の学習展開や指導方法の工夫(ICT機器の活用を含む)、指導上の留意点などを具体的に記述している。 ※本時の目標との整合性、妥当性に欠けることがある。	
学習指導案	【本時の目標及び評価規準等】 1 学習指導要領に示された本時の目標を記述している。 2 本時の目標に準拠した評価規準、評価の観点、評価方法を記述している。 ※本時の目標との整合性、妥当性に欠けることがある。	【本時の目標及び評価規準等】 1 学習指導要領に示された本時の目標を記述している。 2 本時の目標に準拠した評価規準、評価の観点、評価方法を記述している。 ※本時の目標との整合性、妥当性に欠けることがある。	【本時の目標及び評価規準等】 1 学習指導要領に示された本時の目標を記述している。 2 本時の目標に準拠した評価規準、評価の観点、評価方法を記述している。 ※本時の目標との整合性、妥当性に欠けることがある。	【本時の目標及び評価規準等】 1 本時の目標を記述している。 2 評価規準、評価の観点、評価方法を記述している。 ※本時の目標との整合性、妥当性に欠けることがある。	
学習指導案	【本時の学習展開】 学習展開に次の事項を記述し、本時の学習展開が分かる。 1 本時の問題(資料・教材) 2 教材・学習活動 3 主眼点・指示・説明 4 指導の要領が分かる指導上の留意事項 5 評価規準と「努力」を要する児童への具体的な支援	【本時の学習展開】 学習展開に次の事項を記述し、本時の学習展開が分かる。 1 本時の問題(資料・教材) 2 教材・学習活動 3 主眼点・指示・説明 4 指導の要領が分かる指導上の留意事項 5 評価規準と「努力」を要する児童への具体的な支援	【本時の学習展開】 学習展開に次の事項を記述し、本時の学習展開が分かる。 1 本時の問題(資料・教材) 2 教材・学習活動 3 主眼点・指示・説明 4 指導の要領が分かる指導上の留意事項	【本時の学習展開】 次の事項を記述しているが、本時の学習展開に十分に欠けているところがある。 1 本時の問題(資料・教材) 2 教材・学習活動 3 指導上の留意事項	
学習指導案	【指導計画】 1 本時の学習展開が分かる指導計画を作成している。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	【指導計画】 1 本時の学習展開が分かる指導計画を作成している。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	【指導計画】 1 本時の学習展開が分かる指導計画を作成している。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	【指導計画】 1 本時の指導計画を作成している。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	
学習指導案	【児童の現象意識の形成】 1 児童の意見や考えを聞き、気づいたりするなどの反応をしている。 2 児童のよさや伸びしろなどを認めたり、必要と認められる場面があった場合には、適切な対応を行っている。	【児童の現象意識の形成】 1 児童の意見や考えを聞き、気づいたりするなどの反応をしている。 2 児童のよさや伸びしろなどを認めたり、必要と認められる場面があった場合には、適切な対応を行っている。	【児童の現象意識の形成】 1 児童の意見や考えを聞き、気づいたりするなどの反応をしている。	【児童の現象意識の形成】 1 児童の意見や考えを聴いている。	
学習指導案	【児童を引きつける導入】 教材・教具(ICT機器を含む)を使ったり、教材の提示方法を工夫したりするなどして、すべての児童を授業に参加させている。	【児童を引きつける導入】 教材・教具(ICT機器を含む)を使ったり、教材の提示方法を工夫したりするなどして、すべての児童を授業に参加させている。	【児童を引きつける導入】 教材・教具(ICT機器を含む)を使ったり、教材の提示方法を工夫したりするなどして、すべての児童を授業に参加させている。	【児童を引きつける導入】 教材・教具(ICT機器を含む)を使ったり、教材の提示方法を工夫したりするなどして、すべての児童を授業に参加させている。	
学習指導案	【児童の反応への対応】 児童の反応(言葉、言語以外表現、行動など)を理解し、それらに適切に対応し、生かそうとしている。また、児童から質問があった場合には、それに応えようとしている。	【児童の反応への対応】 児童の反応(言葉、言語以外表現、行動など)を理解し、それらに適切に対応し、生かそうとしている。また、児童から質問があった場合には、それに応えようとしている。	【児童の反応への対応】 児童の反応(言葉、言語以外表現、行動など)を理解し、それらに適切に対応し、生かそうとしている。また、児童から質問があった場合には、それに応えようとしている。	【児童の反応への対応】 児童の反応(言葉、言語以外表現、行動など)を理解し、それらに適切に対応し、生かそうとしている。また、児童から質問があった場合には、それに応えようとしている。	
授業実施	【発問・指示・説明】 発問・指示・説明が簡潔でよく分かる。	【発問・指示・説明】 発問・指示・説明が簡潔でよく分かる。	【発問・指示・説明】 発問・指示・説明が簡潔でよく分かる。	【発問・指示・説明】 発問・指示・説明が簡潔でよく分かる。	
授業実施	【目標】 1 児童と目標を合わせて授業を進めている。 2 学習指導要領などの原稿を見ながら話している。	【目標】 1 児童と目標を合わせて授業を進めている。 2 学習指導要領などの原稿を見ながら話している。	【目標】 1 児童と目標を合わせて授業を進めている。 2 学習指導要領などの原稿を見ながら話している。	【目標】 1 児童と目標を合わせていることが少ない。 2 学習指導要領などの原稿を見ながら話していることが多い。	
授業実施	【話し方】 1 教室全員に聞こえる声や速さで話している。 2 声量の大きさ、抑揚をつけた適切な話し方をしている。	【話し方】 1 教室全員に聞こえる声や速さで話している。 2 声量の大きさ、抑揚をつけた適切な話し方をしている。	【話し方】 1 教室の、一部にしか聞こえない声で話したり、早口になり聞き取れなかったりすることがある。	【話し方】 1 教室の、一部にしか聞こえない声で話したり、早口になり聞き取れなかったりすることがある。	
授業実施	【言語環境】 1 学年に応じた話し言葉や文字(板書や教材)を用いている。 2 教師として児童に適切な話し言葉で話している。	【言語環境】 1 学年に応じた話し言葉や文字(板書や教材)を用いている。 2 教師として児童に適切な話し言葉で話している。	【言語環境】 1 学年に応じた話し言葉や文字(板書や教材)を用いている。	【言語環境】 1 学年にふさわしくない話し言葉や文字(板書や教材)を用いていることがある。	
授業実施	【板書】 1 正しい文字、学年に応じた大きさの文字で板書している。 2 強調しようとする箇所は色を覚えたり、線を引いたりするなどの工夫をしている。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	【板書】 1 正しい文字、学年に応じた大きさの文字で板書している。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	【板書】 1 正しい文字、学年に適切な大きさの文字で板書している。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	【板書】 1 誤った文字、丁寧さを欠く文字で板書しているところが見られる。 ※学習内容によっては、掲載などの計画	
【担当教員のコメント】					

(注)レベル1に満たなかった場合は0点とする。